

「信仰による感謝—感謝の礼拝をささげよう—」

ルカ 17:11-19

2020. 4. 26 南与力町教会礼拝

序：礼拝とは何か。

皆が会堂に集まって礼拝できなくなってから、本日で三日目の礼拝です。普段ささげていた礼拝を行えなくなり、私たちは改めて教会とは何か、礼拝とは何かを考える機会を与えられているように思います。

本日の聖書箇所もその「礼拝」が中心的なテーマであると言えます。イエス様によって十人の重い皮膚病の患者が癒されました。そしてそのうちの一人であるサマリア人がイエス様のもとに戻って来て感謝し、神様をほめたたえました。礼拝したのです。しかし残りの9人は戻ってきませんでした。

私たちはなぜ礼拝するのでしょうか。それが「義務」だからでしょうか。本来そうではありません。私たちがなすべき礼拝とは、今日の御言葉が示しているように、「感謝」としての礼拝です。イエス様から受けた神様の恵み・憐れみに対して私たちが感謝する。そのために礼拝する、神様をほめたたえ、賛美するのです。

I. 十人の重い皮膚病患者の願いと清め (17:11-14)

・孤独な生活

しかし、神様を礼拝するという事は当たり前のことではありません。今日の箇所に出てくる十人の人はユダヤ人たちが集まる神殿や会堂（シナゴグ）に入って礼拝することはできませんでした。彼らが重い皮膚病にかかっていたからです。この病気が今日の「ハンセン病」と同じであるかはよく分かりません。もっと広い範囲の皮膚病を指していたのではないかと考えられています。いずれにしても、この重い皮膚病は旧約の律法において「汚れたもの」とされていました（レビ記 13 章）。祭司がその人を調べて重い皮膚病だと分かると「あなたは汚れている」と言い渡したのです（レビ 13:3）。そうすると重い皮膚病の患者は人々から離れて（隔離されて）生活しなければなりません（レビ 13:46）。ですから今日の箇所でも彼らはイエス様から遠く離れて立っています。

今、私たちもコロナウイルスの感染予防のため、人との距離をとるよう言われています。実際に感染し入院することになれば家族とも隔離されてしまいます。面会することも許されません。治らなければそれきりです。それは孤独で悲しい生活だと思えます。重い皮膚病の人たちもそのような生活をずっと余儀なくされてきたのです。家族や友人、社会から隔離され、孤独な生活を送り続けなければなりません。彼らが一緒にいることを許されたのは同じ病にかかった者たちだけでした。

・一人の「サマリア人」の存在

そしてこの 10 人の中には一人の「サマリア人」がいました。それは 11 節で「イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた」と言われていることとも関連します。サマリアにはサマリア人が、ガリラヤ人はユダヤ人が住んでいました。そして当時、サマリア人とユダヤ人とは敵対し合っており、普通は関わることをしませんでした（ルカ 9:51-56 参照）。両者はもともと同じイスラエ

ル民族でした。しかし、紀元前 722 年にサマリアを首都とする北イスラエル王国はアッシリアによって滅ぼされてしまいます。そしてアッシリアの王は、サマリアに多くの外国人（諸国民）を移住させました（列下 17:24）。そうしてそこに残っていたユダヤ人と外国人との混血の民族が生まれ、彼らが「サマリア人」と呼ばれるようになったのです。ユダヤ人はそのような「サマリア人」を「外国人」と見なし、軽蔑しました。そしてサマリア人とはユダヤ人とは宗教的にも対立するようになりました。ユダヤ人は「エルサレム神殿」で礼拝をささげる一方、サマリア人は「ゲリジム山」を礼拝の場所としたのです（ヨハネ 4:20）。ユダヤ人は自分たちを「正統」であるとし、サマリア人を「異端」のように見なしました。そのように二つの民族は互いに敵対し、対立し合っていたのです。

しかしこの重い皮膚病の 10 人の中には一人のサマリア人がいました。おそらく残りの 9 人はユダヤ人だったと思われます。民族としては敵対し合っていたとしても、彼らは「重い皮膚病」という共通の病、共通の苦しみと悲惨の中に置かれた者同士、肩を寄せ合って一緒に生きていたのだと思います。

・イエスによる癒し（清め）

当時、「重い皮膚病」は医者が治すことができないものでした。だからこそ、彼らはイエス様を見つけた時、遠く離れて立ちながらも声を上げて必死で叫びました。

「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と。

彼らは、イエス様なら自分たちの病をいやしてくださると信じていたのだと思います。

彼らの叫びを聞いたイエス様は彼らを見て、言われました。

「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」。

モーセ律法によれば、重い皮膚病が治った場合は祭司に調べてもらい、治っていると判断されれば、清めの儀式を行うことになっていました（レビ 14 章）。そうして初めて社会に復帰することが許されたのです。イエス様は今日の所では、彼らに直接触れていやすということはされませんでした（ルカ 5:13 参照）。また「あなた方はいやされる」というような宣言をされたわけでもありません。ただ「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われたのです。しかし彼らはそれを聞いて文句を言ったりはしませんでした（列王記下 5:9 以下参照）。彼らはイエス様の言葉に従順に、祭司たちのところに向かっていったのです。ユダヤ人たちはエルサレム神殿へ、サマリア人はゲリジム山へ向かったのかもしれませんが。それは彼らがイエス様の言われた通りにすればいやされる、清められると信じたからでしょう。そして実際「彼らは、そこへ行く途中で清くされた」のです。

II. 戻ってきたサマリア人（17:15-19）

・サマリア人（外国人）だけが戻ってくるという驚きと嘆き

そして 15 節 16 節にあるように、その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来ました。そしてイエス様の足もとにひれ伏して感謝したのです。そして「この人はサマリア人だった」と事実が 16 節の最後で初めて明らかにされます。それは驚くべきこと、意外なことでした。

そこでイエス様は言われました。

「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」

清くされたのは確かに十人でした。イエス様に憐れみを請うた十人すべての者が重い皮膚病という病・汚れから清められたのです。しかしイエス様のもとに戻ってきたのは一人のサマリア人だけでした。イエス様はサマリア人のことを「この外国人」と呼んでおられます。この言葉は「他民族の者」とも訳すことができますが、新約聖書ではここにしか使われていない珍しいものです。そしてこの言葉は当時エルサレム神殿の外側に立てられた看板の文章に使われていたようです。すなわち、ユダヤ人以外の「外国人、他民族の者」はこれより中に入ってはいけない、という禁止の看板に使われていたのです。サマリア人もまたユダヤ人から見れば「外国人、他民族の者」であり、エルサレム神殿で礼拝することを禁じられていました。ですからサマリア人はゲリジム山で礼拝をしました。ユダヤ人から見ればそれは間違った礼拝、異端の礼拝でした。

しかしイエス様はここで「この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか」と言われます。すなわち、神殿礼拝から排除されていた「この外国人」だけが、正しい仕方で神を礼拝するために戻って来た、と言われたのです。そこには皮肉があります。「この外国人」以外の9人は「ユダヤ人」だったでしょう。正統な神の民であり、エルサレム神殿で正しい礼拝をしていると自負していたユダヤ人は「神を賛美するため、礼拝するために」戻ってこない。「彼らは一体どこにいるのか」。そうイエス様は嘆いておられるのです。

今や正しい礼拝にとって大切なことは、エルサレム神殿かゲリジム山かという「場所」ではありません。イエス様のもとに「戻ってくる」、そしてイエス様の足元にひれ伏して感謝する、ということが礼拝にとって大切であり、必要なことなのです。

・救いに至る信仰

そしてイエス様は戻って来たサマリア人に言われました。

「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

「いやされた」のは10人すべてでした。しかしイエス様から「あなたの信仰があなたを救った」という救いの宣言を受けたのはこのサマリア人一人だけでした。「いやされる」と、「救われる」とは違います。ここでイエス様がおっしゃる「救い」とは単なる体のいやしにとどまらない、魂を含めた人間全体の「救い」です。そしてそのような救いをこのサマリア人が受け取ったのは、彼の「信仰」によることでした。「あなたの信仰があなたを救った」とイエス様が言われたとおりです。では彼の信仰とはどのようなものだったのでしょうか。

振り返って考えますと、他の9人にも「ある信仰」はあったはずですが。イエス様は自分たちの病を癒してくださると信じたからこそ、彼らはイエス様に憐れみを請うたはずですが。そしてまだ癒される前に、イエス様に言われたとおり祭司たちのところに向かったのも、やはり信仰があったからでしょう。イエス様は自分たちを癒してくださる、清めてくださる。そういう信仰を彼らは持っていたはずですが。しかしその信仰だけでは「救い」に至ることはできませんでした。10人皆が「癒された」のですが、「救われた」のは一人だけでした。他の9人には何が欠けていたのでしょうか。それは、あのサマリア人が示したような「感謝」を伴う信仰です。自分が受けた恵みに対してイエス様に感謝し、神様をほめたたえることを彼らはしませんでした。それはなぜだったのでしょうか。

・戻って来なかった9人

彼らも祭司たちのところ（エルサレム神殿かもしれませんが）へ向かっている途中で清められたのです。そして皮膚の病気ですから、彼らも癒されたことにすぐに気づいたはずです。そして彼らも大いに喜んだでしょう。そして心の中ではイエス様あるいは神様に感謝したかもしれませんが。しかし彼らはイエス様のもとに戻ることをしませんでした。そのまま、祭司たちのところへ、神殿へと向かったのです。祭司たちに見せれば、清めの儀式をしてもらい、社会に復帰することができる。離れ離れになっていた家族や友人たちとも再会できるのです。彼らはイエス様のもとへ戻って感謝し、礼拝するよりも、早く祭司たちのもとへ行くこと、そして清めの儀式を行い、自分たちが元の生活に戻ることを優先したのです。

私たちは簡単にこの9人のことを責めることはできないと思います。私たちがもし同じように重い皮膚病が癒されたらどうするでしょうか。早く祭司に見てもらって、家族に会いたい、仲間に出会いたいと思うのではないのでしょうか。この9人は思ったかもしれませんが。「神様への礼拝は清めの儀式が終わってからでもできる、エルサレム神殿でもできる。今は何よりも早く、祭司たちのところへ行って、清めを宣言してもらいたい、そして家族に会いたい」と。それは理解できることです。実際、イエス様も彼らに「祭司たちのところに行って、体を見せない」とだけ言われたのです。彼らはイエス様から言われた通りのことをしただけです。それなのになぜ責められなければならないのでしょうか。そもそもなぜ「神様を賛美するため、ほめたたえるために」イエス様のもとに「戻って来なければ」ならないのでしょうか。別に神様をほめたたえること自体は、イエス様のもとに戻って来なくとも、神殿に向かう途中でも、また神殿でもできるのではないのでしょうか。

Ⅲ. イエス様が求められる礼拝・感謝

・「自発的な」礼拝・感謝

イエス様は彼らに対して予め「癒されたらわたしのもとに戻ってきなさい。そして感謝し、礼拝しなさい」とは命じられませんでした。しかし、一人のサマリア人が帰って来た時、イエス様は言われたのです。「この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」と。

イエス様は「この外国人」以外にも、「神を賛美するため、神を礼拝するために戻って来た者はいないのか」捜しておられます。そして他にはいないことを知って嘆いておられるのです。

イエス様は私たちに礼拝を強制しようとはされません。イエス様が求めておられるのは、強制されて仕方なくささげる礼拝ではなく、「感謝」の心から自発的にささげる礼拝です。自分が受けた恵みに感謝し、喜んでささげる礼拝。感謝の心から大声で神様をほめたたえる。あのサマリア人のように礼拝する者をイエス様は捜しておられるのです。

・「イエス様への感謝」を伴う礼拝

イエス様は「この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか」と言われました。しかしよく考えてみますと、このサマリア人が戻ってきたのは「神様を賛美するため」というよりも、「イエス様の足もとにひれ伏し、イエス様に感謝するため」ではないのでしょうか。神様への賛美は戻ってくる途中で行っていたのです。しかしイエス様は「この外国人」は、「神を賛美するために戻って来た」と言われました。イエス様にとって、「神様を賛美する」とこと、「イエス様に感謝する」とこと

とは同じこと、一体的なことなのです。そしてそれはこのサマリア人にとってもそうだったでしょう。彼はイエス様のところに戻ることにしに神様を賛美しようとは思いませんでした。なぜなら、彼はイエス様を通して神様が働いてくださり、自分を清めてくださったこと、イエス様を通して神様の恵みと憐れみが自分に注がれたことを信仰によって知っていたからです。ですから、その恵みを与えてくださったイエス様のもとに戻り、その足元にひれ伏し、感謝を表したのです。そしてそのイエス様を通して恵みを注いでくださった神様を賛美し、ほめたたえたのです。彼の「信仰」がそれをなさしめたのです。

イエス様は彼のそのような「信仰」を見て、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と宣言されました。

結論：

私たちもこのサマリア人のような「感謝を伴う信仰」に生きたいと願います。しかし私たちは戻って来なかった9人のことも他人事のように考えることはできません。私たちもまた、イエス様を通して神様からの大きな恵み・憐れみをいただきながら、それを忘れ、感謝のない生活、神様への礼拝が欠けた生活を送ってしまう危険があるのだと思います。イエス様に感謝し、神様をほめたたえて生きるよりも、自分さえよければよいという自分中心的な考えで生きてしまう弱さ、罪深さが私たちにもあるのではないのでしょうか。

私たちもまた自らの罪ゆえに、神様の前に「汚れた者」であり、そのままでは神様に近づけない、礼拝することもできない者です。しかし、エルサレムへと向かわれたイエス・キリストがそこで十字架にかけられ、死なれたのは、まさにそのような私たちのためでした。あの十字架上で流されたキリストの血によって私たちの罪は赦され、清められたのです。それはただイエス・キリストを通して与えられた神様の恵みと憐れみによることです。そのことを知った私たちは、あのサマリア人のように、大声で神様をほめたたえながら、イエス様の御許にひれ伏し、感謝したいと思います。私たちが教会でささげる礼拝、また今それぞれが家でささげている礼拝もそのためにあるのです。それは強制された「義務」としての礼拝ではなく、神様の恵みを知ったものが自発的に行う「感謝」として礼拝です。そのように礼拝する者をイエス様は喜んでくださいます。そして言うてくださるのです。

「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と。

私たちもこのイエス様の言葉に励まされ、押し出されて、今週もまたこの世での生活へと感謝をもって踏み出してまいりましょう。お祈りいたします。

祈り

神様、あなたは罪に汚れた私たちを憐れんでくださり、御子イエス・キリストの血によって私たちが清めてくださいました。しかし私たちはそのような恵みをいただきながらも、あなたへの感謝を忘れ、自己中心的な生活をしてしまう弱く愚かな者です。どうぞあなたの恵みを、イエス・キリストの十字架の愛と憐れみを心に深く覚えることができますように。そして心からの礼拝を、感謝と喜びの礼拝をあなたにささげる者とならせてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。